

第5章 フライイング・ドクターの前途

RFDS の商用化

最後にもう一度、オーストラリアに戻りたい。というのは調査から戻って半年余りたった 2009 年秋のこと、ロイヤル・フライイング・ドクター・サービス(RFDS)をめぐる異様な動きが出てきたからである。

オーストラリア内陸奥地の救急医療は、先に見たように主として非営利法人の RFDS がおこなってきた。名前の頭に「ロイヤル」がつくほど栄誉ある地位を与えられ、それにふさわしい仕事をしてきたはずである。しかし、それに対抗して民間企業が同じ仕事を、もっと合理的に、もっと安くやりますという名乗りをあげてきたのだ。

RFDS は、外見上は RFDS という統一名で表示されるが、ひとつの法人ではなく、実態は全国 4 つの地域に分かれた法人（セクション）が連合体をなしている。すなわちクィーンズランド・セクション、中央オーストラリア・セクション、西オーストラリア・セクション、そしてニューサウスウェルズ州（NSW）とビクトリア州を受け持つ南東セクションである。このうちビクトリア州がフライイング・ドクターの仕事を入札にするという考えを打ち出したのである。

ここで州政府が口を出すのは、救急体制全体の行政的な責任は州政府にあるためである。のみならず、前にも見たようにフライイング・ドクター事業の経費の大半を州政府が出している。

したがって民間企業の名乗りに対して、州政府がこれに応じることは充分考えられる。オーストラリアは空軍ですらコンバット・レスキュー、すなわち戦場での兵員救助の仕事をチャーター契約によって民間ヘリコプター会社に委託しているほどである。

結果としてビクトリア州は救急飛行契約を民間会社の競争相手、ペルエア（Pel-Air）に出すことになった。ペルエアは、この地域に定期便を運航しているリージョナル・エクスプレス航空の子会社である。

運航の安全に疑義

ビクトリア州政府がペルエアとの契約書に調印したのは 2009 年も押し詰まったクリスマス・イブの日であった。しかし、この事実はずぐには公表されず、2010 年 1 月 15 日になってペルエアの親会社リージョナル・エクスプレス社の社長談話から漏れることになった。1 月末現在も契約のこまかい内容は伏せられたままである。

RFDS は直ちに州政府の保健相に面会を申し入れた。政府の考え方を質し、契約調印にいたる経過を説明して貰いたいというのだ。さらにペルエアの運航の安全についても問題があるというのが RFDS の主張である。

というのは 2009 年 11 月、ペルエアの救急機が西サモア諸島から病人を乗せてオーストラリアへ戻る途中、燃料切れのために海上に不時着するという事故を起こしたからである。幸い乗っていた 6 人は患者も含めて救助されたが、燃料搭載量の計算に間違いがあったのではないかという疑問が残った。

まだ結論は出ていないが、そうした疑問を残したままで、ビクトリア州政府が如何なる根拠でペルエアを選定したのか、その理由を明らかにすべきだというのが RFDS の主張するところ。そのため RFDS は 2009 年 12 月 15 日付けの文書で保健相に、1 月 4 日付けの文書で州政府の首相に面会を申し入れたが、忙しくて時間がないという理由から会って貰えない。州政府の方は入札の経過や結果について話し合うつもりはないとしている。

この 80 年余り、オーストラリアという新しい国に移住してきた人びとが、何もない奥地に分け入って、開拓の腕をふるうことができたのも、その人びとの健康を護る RFDS の支えがあったからだ。

RFDS も、もしこの救急医療サービスが利益追求のためにおこなわれるようになれば、飛行の安全と費用効果が維持できなくなるおそれがあると警告している。

入札の利害

今のところ、こうした問題はオーストラリア東部の州に限られているが、民間会社であっても安全や費用効果は変わらないという見方もある。

さらに RFDS が救急医療体制に貢献してきたのはその通りだが、その歴史だけで競争原理にもとづくオーストラリアの経済体制の中で特定の団体に格別の保護を与えていいものかどうかという議論もある。

といって、入札の評価の仕方は決して単純ではない。もとより金額だけを基準として、安いからといって最低価格の入札者を選定しなければならないというわけではない。

たとえば数字では表しがたい質の問題——飛行の安全もその一つで、これを如何に評価すべきか。

金額という量の問題、安全という質の問題、さらにはこの両者を勘案し、時間的な要素を加えた効率の問題なども考える必要がある。

そのうえ RFDS の長い歴史の中には感動的な救命物語も少なくない。そういう実績も、考え方によっては評価の点数に加えてよいかもしれない。そのときは歴史のない新参企業は、加点ゼロということになる。

RFDS の支援者たちは当然のことながら、今の救急飛行を他に委譲すれば、失われるものも大きいと考える。「まったくガッカリです。頭をぶん殴られたような気がします」と語る人もいる。この人は過去 20 年間にわたって毎年奥地に車を走らせ、RFDS への寄附金集めに協力し、これまでに 1,600 万ドルを集めた実績を持つ。

実際、2007 年の実績では、RFDS はオーストラリアで最も多くの寄附金を集めた。それだけ社会や国民からの信頼が大きいということで、ガン協会や盲導犬協会への寄附金より

も多額であった。

それというのも、パブの隅には小さなカンが置いてあって、RFDS のために小銭を入れる仕組みができていて、どんな学校に行ってもフライング・ドクターのために寄付をするという習慣ができていて、しかし、RFDS が飛ばなくなれば、こうしたささやかな寄付金集めの体制も崩れてしまうかもしれない。

変化の時代を迎えて

寄付金集めは人手がかかるので、民間企業はやりたがらない。寄付金がなければ、政府から交付されるぎりぎりの金額だけでやってゆかねばならない。したがって競争入札などを考える政府のやり方は「サクランボの美味しい実をつまむだけで、その陰で働くミツバチを無視するようなもの」と RFDS のニゲル・ミラン理事長はいう。

RFDS の仕事は、単に救急機を飛ばすだけではない。奥地への救急飛行は、RFDS の最も重要かつ基礎的、伝統的な仕事だが、それ以外にも毎週 1 回とか、毎月 2 回とか、一定期間ごとに、診療所のない奥地にドクター、ナース、歯医者その他の医療スタッフを送って住民の健康維持に役立っている。

そして遠隔診療や置き薬の制度など、RFDS の長年の仕事の中から自然発生的に生まれてきた仕事は、今後どうなってゆくのか。このような RFDS の安全ネットワークがなければ、奥地の仕事と生活は続けることができないであろう。

RFDS にたずさわる人びとは、医師もナースもパイロットも大きな誇りを持ち、高い忠誠心を持って仕事をしている。内部の関係者ばかりではない。一般国民も、RFDS といえどオーストラリア全国を通じて、誰でもどこでも同じイメージを抱いていた。しかし今後、各州がそれぞれのやり方で競争入札をするようになれば、契約の形態が地域によって異なり、RFDS の基本的な形態も内容も変化するであろう。

こうした意見に対して、ビクトリア州の救急医療当局は言う。「われわれは RFDS の長年の貢献についてはよく理解している。しかし、行政府の責務は税金を最も有効に効率よく使うことである」「それにビクトリア州は比較的小さく、他の大きな州と違って広大な内陸奥地はない。したがって RFDS の長距離・高速の救急機能も他の州ほど必要とはしない」「現に RFDS がやっていることは、ほとんど病院間搬送だけで、他の州のように総合的な救急システムの一環として組み込まれているわけではない」

ビクトリア州に続いて NSW もフライング・ドクターを入札にかけた。その結果 RFDS が契約を獲得して一と安心ということになったが、これまで NSW とビクトリアの 2 州を担当してきた RFDS 南東事業体としては、担当地域の半分近くを失ったことになる。

クィーンズランド州もフライング・ドクター・サービスは続けるけれども、その契約を受けるのが RFDS とは限らないと声明している。このように RFDS の仕事を民間企業に委譲するという形態は、他の州でも追随者を招くかもしれない。

ジョン・フリン神父の純粋な気持ちから発したフライング・ドクターの制度だが、80 年

余りを経過して、いま変化の時代を迎えたかに見える。

